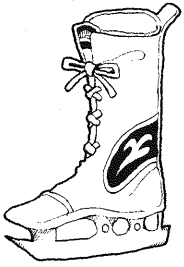
いま、子どもたちは

児童虐待の実像とその防止への支援

落合　美貴子



はじめに

現在、子どもたちの状況は、家庭においては虐待、学校においては学級崩壊や不登校、地域においては援助交際や切れる少年たちの問題と、マスコミに取り上げられない日がないほどの混迷した状況が続いている。これらの要因として、父親不在や母性の喪失、核家族化や少子化による家族ダイナミクスの変化、学力偏重・個性圧迫の閉塞的な教育体制、都市化による近隣関係の希薄化や子どもたちの集団遊びの減少等、専門家によるさまざまな指摘がなされており、今や、子どもを育てることは非常に困難な課題となってしまった感がある。

私は、これまで児童相談所や精神保健センターに

おいて、長らく心理臨床の仕事に携わってきたが、今回、その中でも特に子どもの発達に重大な影響を与える「児童虐待」の事例を取り上げ、その実像と防止への支援の在り方について考えてみたい。

A子の母の場合
―家族の歴史と虐待

A子は一歳の時両親が離婚し、母方祖母に引き取られた。その後母は再婚し、異父弟が生まれたが、二年後の小学校入学を機に、A子は義父と実母と二歳の弟が住む家に引き取られた。義父ではなく、実母による虐待が生じたのはその三カ月後からだった。A子が「言うことを聞かない」と言って母はA子を叩き、泣くとさらに叩き、徐々に体罰はエスカレートしていった。通報により、地域の関係者による訪問等が開始された。母は当初「家の方針で厳しくしつけているだけだ」と訪問を拒んだが、母を責めないという関係者の方針により、しばらく後A子の施設入所を了承した。その後父を含めて家族関係の改善が図られ、最終的にA子は家庭復帰を果たすことができた。

母のA子への虐待はなぜ起こったのだろうか？そのことを解くカギは、A子の母の生育史にあった。A子の母方祖母は、離婚、再婚を数回繰り返し、A子の母は、幼少期より複雑で不安定な家庭環境に育っていた。母は「いつまた家庭が壊れるか常にビクビクしていた」と語り、「自分は絶対母親のようにはならない」と決意していたにもかかわらず、母親と同じように自分も離婚してしまった。だから「今度こそ、失敗できない」という追い詰められた気持ちを抱き、「A子が良い子にしていないと夫がどう思うか」と常に気にしていたという。母のこれらの言葉にあるように、A子の母は、その生育史から、家庭崩壊（離婚）を恐れるあまり、夫のA子への評価を過剰に気にしていた。そのことから、A子のしつけを必要以上に厳しくし、離れていた寂

しさに甘えたいA子の気持ちを受け止める余裕もなかったのである。これらの伏線として、祖母に預けられていた間十分なしつけを受けていなかったA子の実態や、血のつながりのないことから虐待に見て見ぬ振りをしていた夫の態度があるが、要因の中心をなすものは母の生育史であろうと思われた。A子の母は、そのような自分の心の様に気づき、徐々に精神的安定を取り戻し、A子に対しても母親らしい優しさを示すことができるようになっていった。

このA子の母の場合、自身は祖母から体罰は受けていなかった。しかし、親が離婚、再婚をくり返す中で大きな心理的負担を抱えながら生育した歴史が、確実に世代間伝達されたといえるであろう。公的な相談機関では、A子の母のような育ちの問題が次世代に伝達される事例が圧倒的に多く、しかもそのような例の多くが、A子の母のように公的、私的を問わず他者の介入を拒むという、援助に非常な困難さが付きまとうのである。

それに対して、自ら援助を求めるB男の母のような事例もある。

B男の母の場合
―状況性と虐待

B男は、転勤族の父と母の間に生まれた一人っ子であったが、B男が三歳の時、父の転勤により一家は父母双方の郷里から遠く離れた地に引っ越した。父は営業畑で仕事に忙殺され、帰りは遅く休日返上の日々であった。取り残された母とB男は、知り合いもない中で大部分の時間を二人だけで過ごすようになった。母はB男が反抗期に入り、これまでのようにいうことを聞かなくなったこともあって、ある日従わないB男を激しく叩いてしまった。後で後悔の念が沸いてきてB男に謝ったが、その後も虐待をくり返すようになり、そのことは父にも誰にも言え

ず隠し続けていた。いくつかの不運が重なっていた。元々B男の母は友人が少く、親しい郷里の友人がその時期家族の看病で余裕がなく、母は連絡を控えていた。母方の祖母は母が十代の後半に亡くなっており、愚痴をこぼせる女兄弟もいなかった。B男の母はまったく孤立無援の状態だったのである。

転機はB男の母が思いきってある機関に電話相談したところから生じた。母は、「どうしても言うことを聞かないので、頭が真っ白になっちゃって…、叩いちゃうんです」「もうどうしていいかわかんないんです」と泣きながら語った。そこから保健所の子育て相談を紹介され、その相談の中で、幼児を持つ母親のピアサポートグループへの参加を勧められたのである。そこは、数十人のメンバーにより、メンバー同士の集いの他、保健婦や心理士を招いての学習会も開くなど精力的に活動しているグループであった。

B男の母は、当初不安を感じながらも、同年齢の子を持つある母親がいつも積極的に誘ってくれたこともあって、間もなくグループに打ち解け、数カ月後には、グループ以外でもメンバーと交流できるようになっていった。母親とB男の生活は開かれ、虐待は間もなく消失し、母もB男も明るさを取り戻したのである。母は「自分だけが…と思っていましたけど、他にもやっぱり叩いてしまうっていう人もいて、自分だけじゃないと分かってほっとしたっていうか…」「B男も他の児とよく遊ぶし、グループに入って本当に良かった」と語っている。

現代の核家族化や少子化の現状を見れば、B男の母のような虐待はいつどこで起こっても不思議ではない。公園デビューという言葉も使われて久しいが、若いお母さん方自身がその少子化の中で育ち、新たな人間関係を作り出すのに困難さを伴っているのが現状と思われる。

彷徨える子育てを乗り越えて

この二つの事例は、今日生じている「児童虐待」の典型的な二つのタイプを示している。一つはA子の母のように、背景に自身の育ちの問題があり、それが母親になった時に子育てに反映されてしまうという、まさに世代間伝達のタイプであり、今一つは、地域の子育てサポート機能の希薄化や、若い母親の対人関係技術の拙さや、仕事に縛られて共同養育者としての役割を取れない父親や、そういうあり様に父親を追い込んでいる経済優先の社会システム等に根差した、今日的な虐待のタイプである。

二つの事例とも、現代の子育て文化のあり様から当然出現したものではあるが、支援の面から見るといくつかの大きな違いがある。第一は、A子の母は他者からの支援をむしろ拒み、B男の母は自ら援助を求めたという点である。A子の母のようなケースでは、支援を拒み続け、延々と虐待の連鎖を生み、最後には悲惨な形でマスコミに報道されることになってしまうのである。第二は、「虐待」という意識の有無である。A子の母は虐待しているという意識は全くなく、自らは「正しくしつけている」つもりであり、このことが援助の困難さの背景にある。一方B男の母は虐待意識を持ち、罪悪感や無力感に陥っているが、その意識故に援助のレールに乗ることができ、最悪の結末は回避できるのである。第三は、ケアの質の違いである。A子の母のような場合は、専門機関の関わりが必要となり、母自身の心理療法や子どもの心理的回復のための専門的支援、あるいは状況によって親子の分離を考えなければならない。恐らくA子の母はピアサポートグループに参加したとしても、その中で自ら共感的な関係を作ることは難しかったと思われる。その点、B男の母のような場合

は、まさにピアサポートグループに適合する例であり、さまざまなソーシャルサポートの介入が期待されるケースである。

このような虐待のタイプの違いとケアやサポートの違いは、マスコミがこれらを十把一絡に扱っていることもあって一般にはあまり知られていないが、その支援を考える時、この見極めは非常に重要であると思われる。いつでも児童相談所等の専門機関が対応することが適切とは限らず、専門機関の関わりが必要不可欠のケースと、ピアサポートグループのようなソーシャルサポートの守備範囲にあるケースを関係者が見極めることが大切である。そのためには、子育てに関する日常的なネットワークが、保健所、幼稚園、保育園、民生委員、各種専門機関等の関係者により構築されていることが必要であり、そういったネットワークチームの連携により、活用できる社会資源やケースの見立てに関する情報交換が速やかに行われ、危機介入の実効をあげることができるのである。

現在、各関係者から児童相談所や養護施設の充実が叫ばれているが、多少の整備では追いつかないほどの虐待の増加が危惧されている。A子の母を考えると世代間伝達が続々と拡大再生産されているのが現実であると思われる。また虐待はもはや一部の人の問題ではないことはB男の例で明白である。困難ではあっても、専門機関の充実に加え、子育て支援のネットワーク構築を図っていくことが急務であると思われる。関わりのある人々が、連携し知恵を出し合って行く中で、世代間伝達を凌駕する「サポートの連鎖」が起こることを期待したいと思う。

（臨床心理士）

☆文中の事例はプライバシー保護のため改変してあります。